

日本会議の正体



写真はジャーナリスト青木理による平凡社新書新刊。表紙カバー裏から一安倍政権とも密接な関係を持ち、憲法改正などを掲げて政治運動を展開する、草の根右派組織「日本会議」。虚実入り混じって伝えられる、その正体とは。関係者の証言を軸に、その成り立ちと足跡、活動の現状、今後の行方を余すことなく描く。反骨のジャーナリストがその実像を炙り出す決定版ルポ。

日本会議の正体を暴く内容はもちろんだが、メディア(とりわけ日本会議を暴く外国メディア)の役割について述べている「プロローグ」冒頭に注目したので紹介したい。

あたりまえの話だが、私たちは、おのれの顔をおのれの眼で直接見ることができない。もっとも手っ取り早いのは、鏡に映して間接的に見る方法だが、その鏡が曇っていたり、歪んでいたりとすれば、映し出された顔も不鮮明だったり歪んだりしてしまい、おのれの顔をありのままに見ることができない。

メディアにも、似たようなことが言える面がある。足下で起きている出来事であっても、メディアが伝えようとしなければ、私たちは出来事を認識することすらできない。その出来事が驚愕すべきようなことであったり、きわめて異常なことであったり、あるいは早急な対処が必要なほど深刻な事態であっても、メディアがきちんと伝えてくれなければ、私たちは判断や対処の前段階となる出来事自体の発生を認知できず、漫然と事態をやりすごすしかなくなってしまう。仮に伝えてくれたとしても、全体像がきちんと正確に伝えられなければ、やはり同じような陥穽に落ちこんでしまう危険性が高い。

つまり、社会の写し鏡であるべきメディアが曇ったり歪んだりしてしまうと、私たちはおのれの顔を正確につかみとれず、適切な対処や冷静な思考のための第一次素材を手に入れられなくなる。

メディアがそうした状況に陥ってしまう理由にはさまざまある。伝えるべき出来事にまつわるタブー意識だったり、強大な力を前にした際の萎縮や自粛だったり、あるいはメディア内部にいつからか形づくられてしまった因習による場合などもあるだろう。

そんな時、外部から無遠慮な鏡が持ちこまれ、ああそうなのかとハッと気づかされることがある。もちろんその外部の無遠慮な鏡一すなわち外国メディアは、知識不足や偏見から歪んだ像を映し出す場合もあるが、むしろ無遠慮な分だけ妙な曇りや偏りが少なく、そちらの方がストレートに本当の顔をしばしば鮮やかに映し出す。

こんな「プロローグ」で始まる本書から、初めて知ること、学ぶことはじつに多い。一読して感じたことは、日本の政治、とりわけ安倍政権がいかに強く宗教と結びついているかということ。神社本庁を頂点にした巨大な勢力、政権を動かす日本会議の正体だ。それに創価学会をバックにした公明党が控えていることも忘れてはいけない。

(2016年7月20日)